【原　　著】

# 教育実習における附属学校園養護教諭の取組
## ―学校保健活動を遂行する教員を養成するために―

紙川　未央　本田　浩江　北原　章江　古川　育実
上村　弘子　伊藤　武彦　住野　好久　三村　由香里

How Yogo Teachers of attached schools get involved in student teaching

Mio KAMIKAWA, Hiroe HONDA, Akie KITAHARA, Ikumi FURUKAWA,
Hiroko KAMIMURA, Takehiko ITO, Yoshihisa SUMINO, Yukari MIMURA

2015
岡山大学教師教育開発センター紀要 第５号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.5, March 2015

岡山大学教師教育開発センター紀要，第５号（2015），pp.129-138

【実践報告】

**原　著**

# 教育実習における附属学校園養護教諭の取組

## ―学校保健活動を遂行する教員を養成するために―

紙川　未央※1　本田　浩江※2　北原　章江※3　古川　育実※4
上村　弘子※5　伊藤　武彦※5　住野　好久※5　三村　由香里※5

子どもの多様な健康課題に対応して，学校における安全・安心な環境の確保や子どもの心身の健康を守り，はぐくむことのできる体制構築が求められる今日，教育実習等においては，実習生を学校保健に対する関心・理解を高め，子どもの健康・安全な学校生活を考慮した教育活動を展開できる教員として育成することが重要となる。そこで，教育実習等の機会に附属学校園養護教諭が，学校保健活動を遂行できる教員養成を目的とした講義・演習を実施した。その結果，実習生は学校保健に対する認識を高めることができた。附属学校園養護教諭が教員養成に積極的に参画することは，学校保健活動を遂行できる教員養成に果たす役割が大きいといえる。

キーワード：教育実習　学校保健活動　養護教諭

※１　岡山大学教育学部附属特別支援学校
※２　岡山大学教育学部附属小学校
※３　岡山大学教育学部附属幼稚園
※４　岡山大学教育学部附属中学校
※５　岡山大学大学院教育学研究科

### Ⅰ　はじめに

現代の子どもが抱えるさまざまな健康課題に対しては，単に個人の課題としてとらえるだけでなく，学校，家庭，地域の連携の下に，組織的に支援することが重要となる[1)]。そのために学校においては，子どもの健康・安全の保持増進を図る校内体制の確立が求められており，すべての教職員が担うべき役割を持つ。

岡山大学教育学部附属学校園は，岡山大学教育学部と連携し，学校教育，教育研究並びに教員養成を行っている。教育研究においては，幼稚園教育，小学校教育，中学校教育が一貫した理念に立った教育プログラムを展開し，一貫教育の研究主題に基づき研究を進めている。教員養成では，教員養成コア･カリキュラムの中核である教育実習を担い，教育実習生（以下実習生と記す）が教育の本質を会得することができるよう，教育現場で必要とされる具体的指導を経験することができるよう教育実習を展開している[2)]。

附属学校園養護教諭は年間を通して，さまざまな形で実習生に関わる機会を持つ。例えば，日常的な学校生活の中で，体調の悪い子どもやけがをした子どもを連れて保健室にやって来る場面である。その際，けがをした子どもに適切な対応ができないまま連れてくる実習生もいる。また，実習生は子どもの危険を予測できず，本来なら防げるようなけがをさせてしまうこともある。他にも，学校保健についての養護教諭からの講義の時間や，健康診断時・職員作業時・学生自身の体調不良時等さまざまな機会があるが，実習生の学校保健や学校安全についての理解や認識は十分とはいえない。

教育実習では，「大学教育で学んだ理論を実際の教育現場で実践すること」を一つのねらいとしている。にもかかわらず，学校保健に関しては，大学では，学ぶ機会を得ていない学生が多い。

そこで，教育実習期間中に養護教諭が行う学校保健の講義等への取組を実習生の反応から振り返り評価したので報告する。

## Ⅱ　指導の実際

1　目標・目的

各学校園の学校保健活動の取組の実際を知り，教員として生涯にわたり「日常生活において適切な体育・健康に関する活動の実践を促し，生涯を通じて健康・安全で活力のある生活を送るための基礎が培われるよう配慮[3)]」した教育活動を展開する態度を育てる。

2　各学校園の指導時間と指導内容

附属学校園養護教諭は，各学校園で実習生を対象に講義・演習等を行った（表１）。

**表１　附属学校園での学校保健に関する講義等の概要**

| | 対象 | 人数 | 時期 | 実施時間 | 講義内容 |
|---|---|---|---|---|---|
| 幼稚園 | 幼児教育コース 2年次生 | 15人 | 前期 | 6時間 | ・子どもの実態把握<br>・救急処置<br>・学校安全 |
| | 幼児教育コース 3年次生 | 15人 | 実習 1週目 | 45分 | |
| | 副免許取得のための 4年次生 | 約20人 ×2回 | 実習 1週目 | | |
| 小学校 | 小学校教育 コース 3年次生 | 約80人 ×2回 | 実習 1週目 | 45分 | ・子どもの健康実態<br>・保健･安全に関する実習中の配慮事項 |
| 中学校 | 中学校教育 コース 3年次生 | 89人 | 実習 1週目 | 50分 | ・学校保健・安全<br>・保健教育など |
| 特別支援学校 | 特別支援教育コース 2年次生 | 15人 | 実習 1週目 | 50分 | ・健康･安全について<br>・健康診断の工夫<br>・性に関する教育<br>・担任･保護者との連携 |
| | 副免許取得のための 4年次生 | 30人 | 実習 1週目 | 30分 | |
| | 特別支援教育 専攻科実習生 | 6人 | 実習 1週目 | 50分 | |

## Ⅲ　各学校園の取組

1　幼稚園

（1）指導目標と設定の理由

現在，岡山県内で養護教諭が配置されている幼稚園は岡山大学教育学部附属幼稚園１校である。全国的にも幼稚園に配属されている養護教諭は317人（養護助教諭を含む）であり[4)]，ほとんどが１人配置と考えると全幼稚園のうち約3%の幼稚園にしか養護教諭が配置されていない状況である。そのため，健康観察や救急処置，健康診断等学校保健に関することは幼稚園教諭自身が行うことがほとんどである。すなわち，幼稚園教諭は他校種の教諭より子どもがおこしやすいけがや病気に対する知識をもとに，判断と適切な対応を求められる状況にあるといえる。また，幼稚園の教育は環境構成が大変重要であり，遊具の安全性を保持することや園舎内外の安全管理にも力を注いでおり，幼稚園教諭は学校保健・学校安全に関する活動に取組む場面が多い。

そこで，①実習生自身が健康管理をできる，②子どもの健康管理（健康観察･健康診断･救急処置の実際･出席停止等）の実際を知る，③園舎内外の安全管理の実際を知ることを目的に指導を行った。

（2）指導内容及び方法（指導の留意点）

①学校教育教員養成課程幼児教育コース２年次生

「小児の保健Ⅱ」の授業15回中４回の授業（1回90分）を充て，学生が１日来園して講義と観察・実習を行った。

午前中２時間30分は，幼児の観察と園内の安全点検を併せて行った。子どもの遊びについて，場所，遊び方はもちろん，子どもの健康状態や予測される危険等を考えながら観察することや，子どもがけがをしたときの担任の対応（処置の仕方，話の仕方等）も観察するよう説明した。

午後からは午前中に自分たちが観察してきたことをもとに子どもの遊び場として危険と考える場所やその理由及び改善方法を考えさせるために実習生同士で話し合い，発表させた。教員が危険を予測し，環境を整えるだけでなく，子ども自身がけがを予防する力を育てる必要があることを伝えた。

次に幼稚園でおこりやすいけがや病気，その症状を説明し，幼稚園でできる処置の仕方を実習生に考えさせた。その後補足説明をした。

そして，「熱中症予防」と「手洗い」についてのDVD教材を視聴して，実習生自身が実際に子どもに指導をする場面を想定し，子どもにわかりやすい言葉使いや伝え方等を考えさせ，発表させた。

②学校教育教員養成課程幼児教育コース３年次生

主免実習を行う学生は，２年次に前述①のような授業を受けており，幼稚園における学校保健についての基礎知識は得ている。そこで，発展的な内容として，より専門性の高い学校薬剤師による講義を実施した。

幼稚園における昼食指導は弁当持参で行うが，牛乳を飲んだりおやつを食べたりする場面がある。教師が十分注意を払っていないと，子どもはおかずを交換したり，牛乳をこぼしたり等，食物アレルギーに配慮が必要な子どもを危険にさらしてしまう可能性があり，弁当持参といえども注意が必要である。そこで，アレルギーやエピペン®についての講義を計画した。スライドを用いて食物アレルギーについての基本的な説明を受けた後，エピペン®の練習用トレーナーを使って実際に接種練習を行った。そして，アレルギー症状とアナフィラキシーについて説明した。また，子どもの健康状態を把握する方法の一つとして，学生に実際に脈拍数を測定させた。

講義後にレポートを提出させ，実習後には実習全

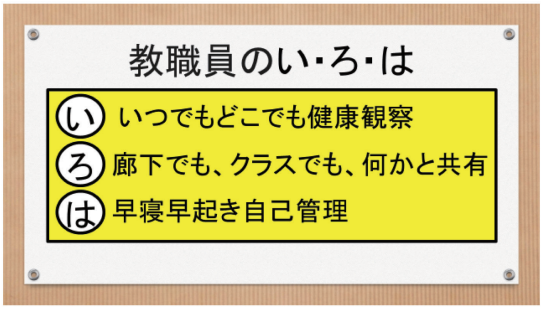
体に関するアンケートを実施した。

③学校教育教員養成課程４年次生（副免許）

４年次生は，３年次（主免許）に各学校園で１時間程度学校保健に関する講義を受けている。そこで，これまでの学びや経験を想起しながら，学校保健に対する理解を深めることと，幼稚園の特性に気づくことを目標にした。

はじめに，「教職員のいろは」（資料１）を示し，関

**資料１**




連する学校保健活動の目的や法的根拠を示した。幼稚園の子どもの様子や他校種との違いを理解させるためにパワーポイントを使用して写真を提示しながら講義を行った。幼稚園の環境と子どもの実態をイメージしやすいように，保健室の来室状況や出席停止等の具体的なデータを示したり，健康診断時の写真を見せたりしながら説明を行った。また，子どもの健康状態を常に把握することの重要性，けが等をしたときの応急処置の仕方やアレルギー対応，日常の保健指導等について，事例を交えながら話をした。最後に実習全体を通して学生に気をつけさせたいことを話した。

講義の事前・事後にアンケートを実施した。回収率は93.3%（15名中14名提出）であった。さらに，講義後にレポートを提出させた。

（３）学生の反応

①学校教育教員養成課程幼児教育コース２年次生

学生は幼児の観察に，意欲的に取り組むことができた。学生の感想からは，「ロッカーの角が危険」，「遊具の塗装がはげていてけがをするかも」等の意見が得られ，危険個所をみつけることができた。しかし，その環境の中で子どもがどのように遊び，危険を回避させるために必要な支援にまでは考えが至っていなかった。また，「子ども同士でトラブルを解決していた」等，遊びの中での子どもの人間関係に着目してしまい，安全面に着目できない学生もいた。

また，熱中症のDVDは一般向けの資料であったが言葉が難しかったようで，集中して視聴できていない受講生もいた。そして，DVD視聴後，幼児に指導する時に使う言葉について発表させたが自信を持って発言することはできなかった。子ども向けの手洗いの指導資料を提示した際は，時間も短くキャラクターも工夫されており集中して見ていた。

②学校教育教員養成課程幼児教育コース３年次生

講義後のレポートからは「初めてエピペン®を触った」，「本日実際に接種の練習をしてみたことで，今後このようなことがあったときには打てる気がする」，「アレルギーについて把握しておくことの大切さがわかった」等の意見があった。

③学校教育教員養成課程４年次生（副免許）

講義後のレポートからは，全員が「教職員のいろは」について記述していた。実習生が「大切」と実感できる事項であったとともに，わかりやすく，覚えやすいものであったと考えられる。

講義の事前と事後では『担任の行う学校保健活動で大切なものはなにか』の問いに対して意識の変化が見られた。例えば，救急処置が大切であると考えた実習生は事前・事後にもいたが，講義を聞いた後に増えている。また，安全管理の項目では事前には，「安全な環境」「けがを見逃さない」と回答したのに対して，事後では「危険を予測する」「けがを予防する」という回答があった（表２）。

**表２　担任が行う学校保健活動で大切なものは何だと思いますか**

| | | | 事前 | 事後 |
|---|---|---|---|---|
| 保健管理 | 健康観察 | 救急処置 | 2 | 7 |
| | | 幼児の体調の把握･確認 | 5 | 3 |
| | | 日々の健康管理 | 2 | 11 |
| | | 衛生的な環境 | 1 | |
| 健康教育 | 保健指導 | 手洗い･うがい | 9 | |
| | | 生活習慣 | 5 | |
| | | 食育 | 1 | |
| | その他 | | 2 | |
| 安全管理 | | 安全な環境 | 4 | 1 |
| | | けがを見逃さない | 2 | |
| | | 危険予測 | | 1 |
| | | 状況把握 | | 1 |
| | | けがの予防 | | 2 |

『学校保健に対するあなたの考え方は変わったか』の問いに対しては，全実習生が「はい」と回答している。その理由としては「今まで少し安易に考えてしまっている部分があった」，「担任の学校保健に対する責任はとても重い」，「応急処置やアレルギー等の知識を学校全体の教職員が持つべき」，「実際にAED等を使って研修に参加して，いざというときに使用できるようにする」等の回答が見られた。これまで

の実習や学校理解から子どもの健康・安全に配慮した教育の重要性は理解していたものの，自らの役割としてとらえるまでには至っていなかった。

（4）指導者の反省

①学校教育教員養成課程幼児教育コース2年次生

午前中は，幼稚園の中で生活している子どもの様子を理解することを目的に観察を行った。学生の感想からは，子どもの動きと環境構成の関連を観察することは難しかったと思われる。午後からは観察したことをもとに講義を進めたが，観察内容の発表と考察に多くの時間を割いたため，学校保健についての講義時間が不足した。しかしながら幼稚園の実際の場面から子どもの健康と安全を考えるために2時間与え，学生同士話し合いをすることで観察の重要性や観察のポイント，幼稚園教諭として配慮すべき事項を実感して身に付けたと考える。成果については，次年度の主免実習時に確認したい。

このように主免実習前に学校保健についての授業時間を得られることは大変貴重である。今後も継続していくためには大学との事前打ち合わせや相談を綿密に行い，授業内容をよりよいものにしていく必要がある。例えば，学校保健に関する基本的講義は，大学における講義の中で行い，幼稚園での授業は，現場だからできる事項を中心に行う。これまで幼稚園での授業は養護教諭が必要と思うものを計画してきた。必ずしも学生のニーズに沿う必要はないが，より興味・関心を持てるように視覚に訴える教材を活用することやワークシートを使っての作業や演習を行う等授業展開を工夫したい。

②学校教育教員養成課程幼児教育コース3年次生

学校薬剤師から話を聞くことで，学校保健を支える関係者の存在を理解することができた。また専門家を活用しての保健管理・保健教育の実際に触れることができた。講義後のレポートから，エピペン®に対しては「初めて話を聞いた」，「はじめて触った」という実習生がほとんどであった。今後，エピペン®を処方され，携帯する子どもが増える中で，実際に触れ，経験しておくことは必要かつ効果的である。今回は講師を依頼し45分で，アナフィラキシー対応，とりわけエピペン®の接種に特化した内容で行った。しかし，繰り返し研修が必要なことや，予防することの大切さを実感させるに至らなかった。

また，事後アンケートに「けがや病気の対応」に「どの程度で養護教諭に見せたらいいのか分からない」という困り感のある実習生がいることがわかり，配付資料の工夫や丁寧な指導の必要性を感じた。

③学校教育教員養成課程4年次生（副免許）

すでに主免実習を終え，学校保健に理解のある採用前教員という対象であると考えて，講義を行った。しかしながら，実習生のレポートには講義前には「養護教諭に頼ろうとする気持ちがどこか自分の中にあった」「子どもの怪我は養護教諭に任せるもの」等，学校保健に関してあまり意識していなかったというような記述がみられた。しかし，幼稚園教諭としての役割を学ぶ中で，学級担任の学校保健に対する責任の重さや応急処置やアレルギー等の知識の大切さ等に気付く学生もおり，学校保健を担う当事者としての意識を持つことができたと考える。

学校保健の内容は多岐にわたるが講義の時間は45分間しかないため，養護教諭が一方的に話してしまうことになる。4年次という対象の実態からも，これまでの学びをいかした上で，短い時間を有効に使うためには内容を精選しポイントを押さえて話をすることが大切である。

2　小学校

（1）指導目標と設定の理由

主免実習の時期には，休憩時間等学級担任の目が届かない時間に子どものけがが多発する。要因として「子どもが実習生との遊びを楽しみにして活動性が高くなる」「実習生が小学生の運動能力等を考慮しないで，一緒に楽しく遊んでしまう」等が考えられる。そのため，休憩時間等に子どもとよく関わる実習生には，子どもの行動特性を知って，周りの環境にも目を向け，けがを未然に防止するような関わりをする必要がある。また万一事故がおこってしまった場合には，速やかな対処が求められる。そして，再発防止のためけがが発生した時の状況を確認し担任に報告する必要がある。併せて，嘔吐物の処理や今日的課題であるアナフィラキシーの対応等についての知識も不可欠である。そこで，①実習生自身の健康管理と②子どもの健康安全（子どもたちの変化に気づけるよう子どもたちをよく見る，適切に対処する，知り得た情報は担任に報告する）を目的に指導を行った。

（2）指導内容及び方法（指導上の留意点）

講義では言葉の情報だけでなく注目しやすいように視覚にうったえるため，また子どもの写真等プラ

イバシー保護のために配付できない資料を提示するためスライドを用いて行った。

まず，「教職員のいろは」（資料 1）を説明し，関連する学校保健活動の目的や法的根拠を説明した。子どもと適切に関わることができるようにするため本校の子どもの実態を示した。学校保健活動の実態や意義をつかめるよう定期健康診断の実際の場面の写真を示し「担任はここで何をしているのか」を考えさせた。また，子どもの保健室の利用状況やけがの発生状況を示し，10 ～ 11 月にけがが多いこと，休憩時間等担任の目が届かない時間帯にけがが多発すること等を伝えた。次に，子どもによくある「擦り傷」「鼻血」の処置の方法を説明した。そして，実習中の授業を計画する際，色の見え方に特性のある子どもがいることを前提に色覚に配慮した板書計画を立てるよう説明した。そして，嘔吐物の処理，アナフィラキシーの対応等にも触れた。

日常生活の中で子どもに指導できる（実習生自身にも取り組んでほしい）内容として，手洗いうがい，早寝早起き，朝食を食べること等を紹介した。

そして，実習中の注意事項と本校での特別支援教育の取組について説明した。

講義の事前事後にアンケートを実施した。

（3）実習生の反応

3 年次実習生のアンケート結果をまとめた。回収率は 94.9%（79 名中 75 名）であった。

事後アンケートにおいて講義の時間は必要か否かについて，必要と回答した者（以下 A 群と記す）は 58 人 77.3%，必要と回答しなかった者（以下 B 群と記す）は 17 人 22.7% であった。

①学級担任の行う学校保健活動で大切なもの

「学級担任の行う学校保健活動で大切なものは何か」の記述回答について 2 群で比較した。図 1 に示

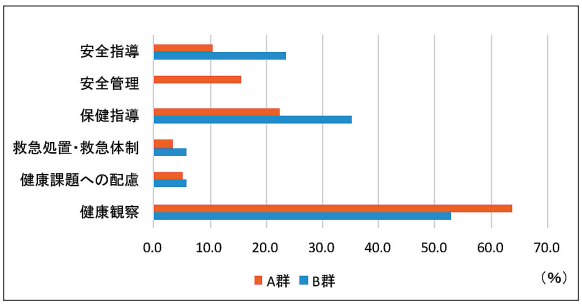



**図 1　大切なもの（事前）**

した通り，講義を行う前は，保健管理に関する事項で，A 群約 60% 程度，B 群 50% 程度の者が「健康観察」を大切と記述している。しかし，健康課題への配慮や救急処置・救急体制等に対する意識は A 群，B 群ともに数 % と低いことがうかがえる。また，表 3 に示したように保健指導に関して，A 群では「手洗い・うがい・清潔」ほかにも「熱中症予防」や「病気の予防」，「生命尊重」，「食」等多岐に渡って記述していた。一方 B 群では「手洗い・うがい・清潔」や「生活習慣」のみであった。また，安全に関しては，A 群では「けがの予防」の指導のほかに安全な環境づくり等安全管理に関する記述がみられた。一方 B 群では安全管理に関する記述は無く，けがの予防等の指導のみであった。A 群では管理面指導面共に重要と考えているが，B 群では，指導面を重要とする記述が多かった。講義後の回答では，A 群 B 群共に講義前と比べてアンケートの記述文字数が著明に増えた。学校保健活動の具体的な方法や大切と考える根拠等を記述している。「どのような場面においても子どもの健康を観察し，安全であるか，体調を崩していないかを確認すること」，「子ども・生徒の体を守る立場であるため」，「毎日の子どもたち一人一人の心身状態の把握と，見落とさない・見逃さないこと」，「学級担任だからこそわかることがあるから」のように子どもの身近にいる【学級担任としての自覚】をした者，「子どもの健康状態を常に把握しておくこと。また，それらを考慮して授業を行っていくこと」，「適切な判断を瞬時に行うこと」等【自らに求められる判断を意識】している者，「子どもたちをよく見る。配慮された活動。子どもの

**表 3　学級担任の行う学校保健活動で大切なものは何だと思いますか。（事前）**

| | | | A 群 | B 群 |
|---|---|---|---|---|
| 保健管理 | 健康観察 | 朝の健康観察 | 11 | 3 |
| | | 日常的な健康状態の把握・健康観察 | 22 | 4 |
| | | 観察から変化への対応 | 3 | 2 |
| | | 教育的な健康観察の実施 | 1 | |
| | 健康課題への配慮 | 視力・聴力等への配慮 | 1 | 1 |
| | | アレルギーへの配慮 | 1 | |
| | | メンタル | 1 | |
| | 救急処置・救急体制 | | 2 | 1 |
| 保健教育 | 保健指導 | 手洗い・うがい・清潔 | 7 | 3 |
| | | 病気の予防 | 1 | |
| | | 命・生命尊重 | 1 | |
| | | 食 | 1 | |
| | | 熱中症 | 1 | |
| | | 生活習慣 | | 2 |
| | | その他（具体的な指導内容なし） | 2 | 1 |
| 安全 | 安全管理 | 安全な環境づくり | 5 | |
| | | 安全に配慮した子どもへの関わり | 4 | |
| | 安全指導 | けがの予防 | 6 | 4 |

ことを（学校）全体で把握する」というように【教育活動の中での配慮】まで考えられるようになった者がいた。講義前には「健康観察」を子どもの健康

**表４　学級担任の行う学校保健活動で大切なものは何だと思いますか。（事後）**

| | | | A 群 | B 群 |
|---|---|---|---|---|
| 保健管理 | 健康観察 | 朝の健康観察 | 1 | 1 |
| | | 日常的な健康状態の把握 | 10 | 1 |
| | | いつでも,どこでも | 9 | 2 |
| | | 早期発見･早期対応 | 5 | |
| | | 子どもの身近にいる担任としての自覚 | 7 | 2 |
| | | 結果の活用 | 3 | |
| | | 情報共有 | 4 | |
| | | メンタル,悩み | | 1 |
| | 健康診断 | 実態把握 | 2 | |
| | 子どもの健康情報 | 情報共有 | 3 | |
| | | 把握と共有 | 1 | 1 |
| | | 保護者 | 1 | |
| | 健康課題への配慮 | アレルギー | 4 | 1 |
| | | 色覚 | 2 | |
| | | 全般 | 1 | |
| | | 体調管理 | | 1 |
| 救急処置・緊急時対応 | | | 7 | 1 |
| 保健教育 | | 予防 | 1 | 1 |
| | | 確かな知識 | 2 | 1 |
| 安全 | 安全管理 | 安全な環境作り | 4 | 2 |
| | | 正しい知識 | 3 | |
| | 安全教育 | 安全指導 | 1 | 1 |
| その他 | | 自己管理 | 2 | |

状態を把握するのみととらえていた者が表４に示したように講義後には早期対応や結果の活用，情報共有等についても意識できるようになっていた。

②講義内容について

図２に示した通り，「わかりやすかった」と回答し

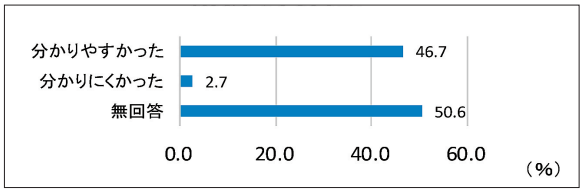



**図２　講義の内容は**

た者は 46.7%，「わかりにくかった」と回答した者は 2.7%，無回答は 50.6% であった。「わかりやすかった」理由は，「実際の指導場面で気をつけるべきことを知ることが出来た」，「けがの具体的な処置が知れた」，「健康というのは身体のこともあれば，心のこともあるということを意識することができた」等である。反対にわかりにくかった理由は「内容が深く多い割にスライドで終わったのでもう少しくわしく聞きたかった」，「処置の仕方の説明がわかりにくかった」であった。また，「アナフィラキシーやアレルギーのことは知らなかったので，知ることが出来てよかった」等の記述が多く，「吐物の処理の仕方を具体的に知ることが出来たので，実際目の前で起きたときにも実践できそう」という記述もあり，これらの内容は実習生には新しい知識であった。また「子どもと接する前に気をつけなければならないことは何か再確認することが出来た」との記述もあった。

③講義後の学校保健に対する考え

講義後に「学校保健に対する考えは変わったか」の問いに「はい」と回答した者（以下 C 群と記す）は 75 人中 54 人（72.0%），「いいえ」「どちらとも言えない」無回答の者（以下 D 群と記す）は 19 名（28.0%）であった。C 群では「担任にできることは想像以上に多く，学校保健活動における担任の重要性を感じた」，「子どもの健康実態を把握し，授業に活かしているということは知らなかった」，「保健のことは保健室（または養護教諭）の仕事というイメージがあったが，担任や全職員がやるべきことだと認識が変わった」，「担任が率先して子どもたちの健康を見守る必要がある」等の記述があった。D 群では「あらかじめ理解していた」，「イメージ通り」，「教師として当然のこと」，「必要なものだとわかってはいたが，詳しく知ることが出来たのはよかった」と記述している。

（４）指導者の振り返り

アンケートの結果から，講義は概ね有効だったと考える。また実習生はけがや病気に対する具体的な対処方法や法律等新たな情報を得たいと思っていることもわかった。今回，45 分の講義のみで終わるのではなく，事後にアンケートを行ったことで実習生自身が振り返り，言語化することで意識を変えることができた。学校保健に対する考えが変わったという C 群だけでなく，考えが変わったと自己認識していない D 群においても認識を深めることができたと考える。さらに学校保健に対する意識を定着させるための取組は今後の検討課題である。

一方で，講義の時間は不要と回答した実習生がおり「せっかくの実習中で子どもと触れ合う時間を削るのではなく，前もって大学の講義等で受けていればよかった」と記述する者もいた。

今回，45 分間にスライド 45 枚を提示しながら話を進めたが，実習生の回答にあったように情報量が多すぎることは否めない。しかし，教師として子どもたちの健康や安全が守れるよう，学校保健活動の基礎的な内容で教育実習に必要と思われる最低限の情

報である。そのため実習初期にこの講義を設定しているが，附属学校園での実習を「大学教育で学んだ理論を実際の教育現場で実践する」機会とするためには，学校保健に関する講義は大学において実施することが望ましいと考える。

3　中学校

（1）指導目標と設定の理由

学校においては，生徒の事故や傷病に対して，教職員の誰もが対応できるよう緊急時の体制を整えている。実習生であっても一人の教職員として学校での事故発生時の動きを確認しておく必要があり，①実習生自身の動き，②学級担任として管理職や養護教諭，外部機関との連携を理解することを目標に指導を行った。

（2）指導内容及び方法（指導上の留意点）

講義30分，演習を20分で構成した。

まず実習生の学校保健に関する認識を指導者がつかむために「保健室のイメージ」について実習生同士で意見交換させた。そのあと，学校保健の概要について説明した。

次に，学校での事故発生時の動きを考えさせるために「子どもの手にガラスの破片が刺さった」という状況を想定して役割演技を行った。実習生8名に，怪我をした子ども・友人・担任・養護教諭・管理職・保護者等の役割を演じさせ，その他の実習生は，各役割の動きを見て，円滑な動きができている点・演者が困っている点に着目して観察させた。

役割演技を振り返りながら，緊急時の対応として①傷病の把握，②的確な判断と処置，③連絡，④事後指導，⑤救急体制の整備についての説明を行い，緊急時には養護教諭だけでなく，現場に遭遇した教員にも判断が求められることを説明した。

最後に「教職員のいろは」（資料1）を提示し，学校保健は養護教諭だけでなく教職員全員が学校全体で取り組むべきものであることを強調した。

講義終了後に実習生に感想を記述させた。

（3）学生の反応

役割を演じた者は，報告・連絡・相談の方法に戸惑い，演技が中断する場面もあった。振り返りの中で，演者は「緊急時にはとりあえず動かなければいけない」ことがわかったが，「何をしたらよいのかわからない」ことに気付いた。また「もっと子どもに寄り添った声かけができれば良かった」等，生徒の心情に配慮した対応を反省する声もあった。

授業後の感想から，演者，観察者ともに，緊急時の対応や役割演技の内容に関して，「学校内で何か起こったとき，養護教諭じゃなくても正しい判断と行動が求められるのだと思った」等，緊急時の対応に実習生自身が直面する可能性に気付いていた。さらに，「緊急時の想定をすることは大切だと感じた」，「緊急時は焦ると思うので，普段からの心がけや準備，意識，（処置等に関する）知識が大切だなと痛感しました」等，自分自身が対応していくことへの意識や，「緊急時の人手の多さの大切さを知った」，「チームワークの大切さを学んだ」等，救急体制や組織としての動きを意識していた。

一方で，実習生自身が危機的状況に直面したとき，冷静に対応できるのかという不安な想いを抱いた実習生もあった。

（4）指導者の振り返り

実習生の感想から，講義・演習に対して肯定的に関心を持って取り組んでいたと思われる。講義だけでなく，演習を取り入れたことで，実習生は教員の立場で緊急事態に遭遇した際，具体的な動きを理解していなければ，動けないことを実感し，緊急時の救急体制を理解して，自らが動くための具体的な方法を考えるきっかけになったと考える。

今回の役割演技では，最低限の設定を伝えるのみで，実習生たちに自由に演じさせた。その結果，実習生に対し，緊急時に抑えるべきポイント等を理解させるための演習ではなく，「動こうと思っても動けない」という課題を実感させるものとなった。役割演技等を用いた演習は，実際の緊急時を想定させ，起こりうる問題を考えて動く仮想体験をさせることができる。しかしながら，自由度が高く，さまざまな場面展開が予想される。最終的に理解させたい内容（今回の指導では，緊急時の動きを理解すること）に到達するためには，役割を演じるよりは，むしろ決められた動きに基づいて模擬するシミュレーションを取り入れる等を今後は検討したい。

4　特別支援学校

（1）指導目標と設定の理由

子どもの障害特性や基礎疾患を理解したうえで，健康・安全に配慮しながら教育活動を展開できるようになることや，子どもの健康上必要な情報の共有を

意識できるようになることを目標にしている。

（2）指導内容及び方法（指導上の留意点）

特別支援学校教諭一種免許状を取得する全ての実習生に対し，以下の①～③を中心に講義を行っている。視覚支援の様子や環境の工夫等をわかりやすく説明するために，パワーポイントで写真を提示した。具体的には，健康診断時の実際の視覚支援の様子や，使用している道具や環境の工夫等である。

①保健管理

知的障害のある人は体調を伝えることが難しい場合が多く，体調の変化に気付きにくい[5]。教職員は，子どもの体調変化にいち早く気づき，対応できるように，登校時から健康観察を注意深く行っている。観察のポイントは，いつもと様子が異なるときは体調不良を疑うことである。

また，身体の特性として抵抗力が低下しやすい子どもがいること，教育実習中にも排泄指導や摂食指導等身体接触の機会が多いこと，また小学部の子どもはスクールバスで集団登校していることから，感染症への配慮が重要である。

上記の内容とともに，実習生自身の健康管理の説明をするため『教職員のいろは』（資料 1）を提示した。

②保健教育

特別支援学校では，保健教育が自立と社会参加に必要な基本的生活習慣を身に付けるための学習として重要な役割を果たしている。

また，変化に弱い子どもの中には，急な発毛や体の変化にとまどって混乱してしまう子もいるため，変化が起こる前から思春期の心と体の変化（二次性徴）について学習することも大切である。

当然，健康診断も全て学習の場であり，目的には「抵抗なく医療機関へ受診できる子どもに育てること」も含まれる。見通しが持ちにくく不安が強い子どものための視覚支援や，個の特性に合わせて支援を工夫して，学校医や保護者とも連携して取り組んでいる。

③安全教育・安全管理

子どもが安全に学習するためには，危険を予測・回避することや，必要な時に助けを求める力が必要である。

教師は休み時間であっても遊具の使い方や，子どもが安全に遊べる環境であるかを常に意識して一緒に活動することが必要である。

（3）学生の反応

講義の感想を聞いたところ，「『教職員のいろは』の，いつでもどこでも健康観察は，その通りだと思いました」という声があった。また，ろ）の，廊下でも，クラスでも，何かと共有の話をしている時には，実習生のうなずきが多く見られた。『教職員のいろは』のスライドを出した途端に，メモをとりだす実習生もみられた。

４年次生（副免許），特別支援教育専攻科実習生に実習事後アンケートを行った。講義の必要性については，「必要」と回答した者が 80%，「あったほうがよい」と回答した者が 20% であった。

講義の内容については図 3 に示した通り，「わかりやすかった」と回答した者は，73.3% であった。また，「初めて聞くことが多かった」と回答した者が，46.7% だったが，『初めて聞くこと』の内容については，今回のアンケートだけでは分からなかった。

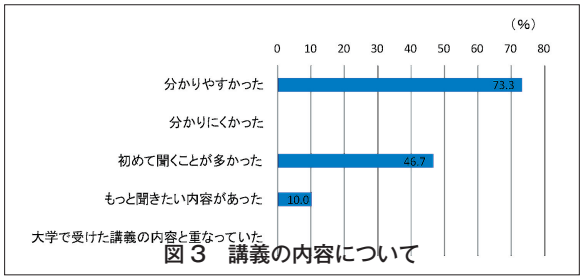



**図３　講義の内容について**

さらに，自由記述は，①特別支援学校における【保健活動の特性】，【学級担任としての保健活動に対する自覚】【養護教諭との連携】の３つのカテゴリーに分けることができた。

【特別支援学校における保健活動の特性】では，「特別支援学校における健康管理の大切さがわかった」，「特別支援学校ならではの話が多く，指導に生かしていきたいと思った」という意見があり，『特別支援学校ならでは』というキーワードが抽出されたが，実習生が『特別支援学校ならでは』と考える具体的内容についての記述は得られなかった。

【学級担任としての保健活動に対する自覚】では，「担当の生徒について，保健の目線で話を聞くことができてよかった」という意見がみられた。このことは，保健室から見える子どもの実態として，予定の変更が苦手な子どもの中には，保健室に行くと早退しなければいけないと思い，体調が悪くても保健室に行くことを嫌がる子どもがいる等具体的な子どもの実態を話したことで，実習生が子どもを多面的に見るようとする意識につながったと考える。

【養護教諭との連携】では，「養護教諭と教師がどのようにして情報交換を行っているかがわかった」「養護教諭と連携していく必要性を十分に感じた」とい

う意見があった。担任とやりとりをした具体的な場面を提供することで，養護教諭との連携の必要性を感じられたと考えられる。

（4）指導者の振り返り

今年度から，パワーポイントを使用して講義を行ったことで，健康診断の場面の写真を提示することができた。子どもが健康診断を受けている様子を見ることで，実習中に体験することができない実習生も，雰囲気をつかむことができるのではないか。

4年次生（副免許）は，主免許取得のための教育実習時に，各附属学校園の養護教諭から学校保健についての講義を受けている。すでに学びの経験があるため，講義時間を30分に設定しているが，特別支援学校で実習するにあたって最低限わかっておくべきことを伝えるためには，時間が短い。今後は，これまでの学びをふまえた上で，講話内容の精選や，時間の設定の改善をする必要もあると思う。

特別支援教育コース2年次生・特別支援教育専攻科生は，講義時間が50分であり，質疑応答の時間が確保できた。質問の内容は，服薬管理や保健指導の方法や教材について等であった。学生は，具体的な支援方法を求めていた。すなわち，学生が養護教諭に何を聞きたいかを事前に調査することで，学生の学校保健に対する認識や知識の実態がわかる。今後は，学生の実態やニーズを把握し講義の内容を検討していきたい。

講義時の様子や講義後の感想から，今回作成した『教職員のいろは』への反応はよかったと思う。また，日常の観察から教職員同士の会話を「情報共有する場面」と実感することができていたため，うなずきがでたのではないかと思う。このように学校保健に関する教員として必要な事項を印象的で覚えやすい方法で伝えることは有効と考える。

そして『教職員のいろは』は，子どもと関わり教育活動を行う上で，必要な内容である。実習初日から実践できるようにするために実習前に理解しておくことが望まれる。そのためには，大学と連携し，実習前に学習機会を設定できたらよいと考える。

## Ⅳ　実習生に期待すること～教職員のいろは～

養護教諭から見た，教職員として活動するために大切だと考えられる内容を『教職員のいろは』にまとめた。これらの事項は，実習生に期待することであると同時に，全ての教職員に共通の事項である。今回の取組で，各学校園共通の指導内容として取り扱った『教職員のいろは』は，今後の指導内容を検討していく上で，活用していきたい。

い）いつでもどこでも健康観察

教職員が行う日々の健康観察の果たす役割は大きい。健康観察は，教育活動を円滑に進めるために行われる重要な活動である[6]。実際に，1日の学校生活の中で，子どもと関わる機会が多いのは，養護教諭よりも学級担任であり，子どもの変化に早期に気づきやすい立場にある。将来学級担任となる実習生は，健康観察時の子どもを観察する視点を身に付ける必要がある。朝の会で行う健康観察の際に単に遅刻・欠席を管理するだけでなく，その日一日を元気に過ごすことのできる状態なのか，普段の様子と比べながら，顔色，表情，声の様子等に着眼してほしい。また，健康観察は，朝の会だけでなく，日常生活のあらゆる場面で行っていくことが大切である。このことは，本学の教育実習Ⅰの手引「(4) マネジメント力」の中に「子どもたちの健康と安全を守ることは学校の責務」と明記されており具体的な例も示されている[7]。にもかかわらず，実際には，具体的な学習指導や生活指導の場面に意識が向きがちだが，その基盤となる健康の重要性にも気づいてほしい。

ろ）廊下でも，クラスでも，何かと共有

学校全体で子どもの健康状態を把握し適切に対応するために，クラスや家庭での様子を，養護教諭や他の教員とで共有することは欠かせない。

病院受診の結果と学校での配慮事項，家庭での様子等保護者からの健康に関する情報を共有している。

教職員間での情報共有は重要であるが，一方では他の子どもに不要な情報が漏れないような配慮も必要である。

以上，い）ろ）で示したように子どもの実態を把握し，教職員で連携することで，子どもの傷病等を早期発見・早期対応することができる。また，子どもの健康・安全に配慮した教育を展開することができる。加えて，万一の場合に対応できる備えも必要であるが，い）ろ）の基本をまず押さえたい。

は）早寝早起き自己管理

子どもへの配慮同様に，実習生自身の健康管理の徹底が求められる。学校生活では，感染症への配慮が欠かせないため，自己の体調不良を把握し，実習を休む判断・勇気も感染拡大防止と，子どもの健康を守るために非常に大切なことである。実習生も，健康な状態でなければ，充実した実習はできないと考

える。このことも生涯にわたって,同様のことがいえ,自らの健康に対する意識や行動が，子どもの教育に影響を与えていることを理解してほしい。

## V　おわりに

今後 10 年で 3 割以上のベテラン教諭，養護教諭が定年退職の時期を迎える今日[8]，若手教員にはこれまで以上の即戦力が求められる。養成段階で養護教諭が学校保健活動を推進する中核的役割を担う力量を育成することは一層の課題となり，教諭にもまた学校保健を担っていく力量が求められる。そのためにも大学と附属学校園は連携・協力して養成にあたる必要がある。

養護教諭も，次の世代を育てるという視点で積極的に教育実習に関わっていく必要がある。実習生には，教育実習で学校保健から教育活動を考える視点に気づき，実習中に課題を見つけ，実習後の大学における学びや自主的な学びの中で学校保健に関する知識を積み上げてほしいと願う。もちろん本来は，大学における必修科目として学校保健が実施されることが望ましい。しかしながら，現状では学校保健を必修とする教員は，養護教諭並びに保健体育科を専修とする教諭のみである。それならば，例えば，毎日，新聞に目を通すようにすることや，社会の情勢等からも，子どもの健康問題に関する事柄に敏感になることで，自らの意識を高め知識を増やすこともできる。何もかも大学まかせ，実習まかせ，でなく実習等の経験や学びの中で,「気づき」や「興味」を持つことで,自ら学ぶことのできる姿勢を身に付けてほしい。

学校保健の遂行をあたり前のこととして，子どもの健康と安全を支える教職員がますます増えることを期待し，附属学校園の養護教諭として，実習生に関わっていきたい。

## 参考・引用文献


1）中央教育審議会：子どもの心身の健康を守り，安全・安心を確保するために学校全体としての取組を進めるための方策について（答申），2008

2）岡山大学教育学部附属小学校：教育実習の手引

3）文部科学省：小学校学習指導要領，2008

4）文部科学省：平成 25 年度学校教員統計調査（中間報告）2014 年 8 月 4 日公表．Available at: http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/NewList.do?tid=000001016172，Accessed at December 23, 2014

5）飯野順子，岡田加奈子，玉川進：特別支援教育ハンドブック，東山書房，p75，2014

6）文部科学省：教職員のための子どもの健康観察の方法と問題への対応，p6，2009

7）岡山大学教育学部：教育実習Ｉの手引き（1・2 年次用），2014

8）文部科学省：平成 22 年度学校教員統計調査，2012 年 3 月 22 日公表．Available at: http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/NewList.do?tid=000001016172，Accessed at December 23, 2014


---

How Yogo Teachers of attached schools get involved in student teaching


Mio KAMIKAWA※1，Hiroe HONDA※2，Akie KITAHARA※3，Ikumi FURUKAWA※4，
Hiroko KAMIMURA※5，Takehiko ITO※5，Yoshihisa SUMINO※5，Yukari MIMURA※5


Keywords: Student teaching, School Health activity, Yogo teacher


※1　School for Handicapped Children Attached to the School Education, Okayama University

※2　Kindergarten Attached to the School Education, Okayama University

※3　Primary School Attached to the School Education, Okayama University

※4　Junior High School Attached to the School Education, Okayama University

※5　Graduate school of Education, OKAYAMA University


---